

桜陽会裏話

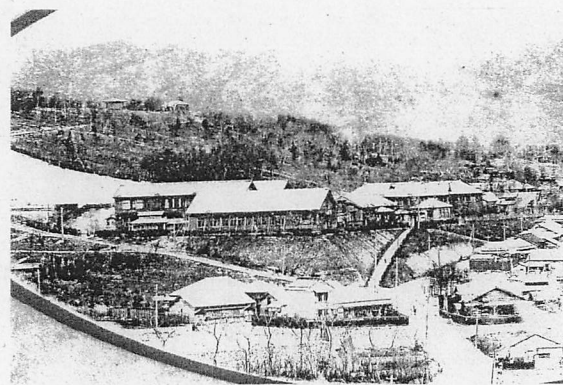
「桜陽会110年を迎えて」

高校17期 桜陽会相談役 本間 達洋

令和最初に卒業された皆様おめでとうございます。高校72期として今年で110年を迎える同窓会「桜陽会」の一員となられ、心から歓迎申し上げます。又、本年7月には、オリンピック東京大会の開催を迎えることで、ご卒業の皆様にも、在校生の皆様にも、ひときわ印象深い年になるでしょう。さて「高校72期」とか「桜陽会110年」と急に言われてもご卒業の皆様はもとより、後に続く現役生徒さん達もすぐに理解するのが難しいかもしれませんが、今回は「裏話」というよりは「同窓会の歴史と意義」を記して、今後の桜陽会活動に理解の一助になれば幸いです。

本校の前身、庁立小樽高等女学校は、明治39年(1906)5月1日、札幌、函館に次いで3番目の道立の4年制高等女学校として開校、初年度は、2年生50名、1年生50名が入学試験競

争率は2年生1.86倍、1年生は3.26倍と伝えられる)を経て入学を許可されます。当時は日露戦争後で発展途上にあった小樽区(市制は大正11年)唯一の公立高等女学校として入学希望者が多く、余市ほか後志地方、遠くは道北ほか離島からも入学者があり、入学定員も後に250名(5学級)まで増加したため、2棟の寄宿舎を持つまでにあります。明治42年(1909)3月に開校時2年生で入学した生徒が3年間を終え、第1回本科卒業生(50名)として巣立ちますが、こ



大正4年(1915)頃の旧庁女校舎全景(現青葉園中学校校地) 創立10周年記念誌より

の時点での同窓会創設の話はなく、翌年3月に4年間の学業を終えた第2回本科卒業生(43名)を加えた93名をもって庁立小樽高等女学校同窓会が卒業式後に創設されました。

会長は第2代小林到校長、副会長には関亮一郎首席教諭(教頭に相当)が会長起草の会則に依り選任され、幹事3名、教諭、常任委員7名(第1回生5名、第2回生2名)をもって役員会が発足しました。会則第1条には、「本会は同窓の友誼を厚くし、智徳を進め、母校の趣旨を発揮するを以て目的とす(原文のまま)」と設立の目的を掲げており、110年後の現在の桜陽会会則が第2条で「本会は会員相互の親睦を図り、母校発展に寄与する」と簡潔に掲げているのと同じ趣旨であり、卒業生は「建学の精神を忘れず仲良く研鑽に努め、物心両面で母校発展を後援しましょう」という意味であります。

同窓会発展の経緯は、大正6年(1917)6月に刊行された創立10周年記念誌の同窓会沿革として詳細な記録があるほか、第1回同窓会総会(現在まで続く定時総会)が明治43年(1910)8月25日に開催された資料現存、翌9月に第1回役員会が開催され、幹事、常任委員の以後の役割分担を定めた記録があることなど、現在まで続く同窓会組織や行事の原型が出来つつあることが見てとれます。創立10周年を迎える頃で550名余だった卒業生も以後順調に増加すると共に、東京女子高等師範学校(現お茶の水



平成28年(2016)7月(開校110周年の記念として) 現役生、卒業生など1,100人が潮ねりに参加したことを伝える桜陽新聞

女子大学はじり上級学校を卒業してから母校で教鞭をとるケースも増え、そうした教師を中心にして同窓会活動は活発化します。同窓会誌の刊行、支部の設立、卒業生名簿の刊行や同総会館建設計画が持ち上がるまでになる状況の中、昭和6年(1931)3月21日の臨時総会で同窓会の名称を東京女子高等師範学校の同窓会名「桜陽会」を参考に「桜陽会」とすることを決議します。以後「桜陽会」という名称は現在まで89年間、同窓会としては110年間続いているのです。この頃をピークに昭和22年(1947)3月の4年制庁立高等女学校最後の卒業式までの10数年間は戦時体制が長かったことと戦後の混乱により桜陽会活動は記録も残っておらず不振を極めます。以後昭和25年(1950)4月までの学制改革(633制採用と3年の移行期間)という変革の中で、昭和23年(1948)9月に桜陽会会長として村山千代氏(庁女8期)が初めて会員中から賛同を得て選ばれ、母校校長は名誉会長となって桜陽会も新しい時代を迎えます。

昭和25年(1950)4月1日、本校は「北海道小樽桜陽高等学校」と改称し、男女共学総合制(商業課程新設)で校名と昭和6年以来の同窓会名が同じという全国的にも例のない新制高校として再出発します。昭和27年(1952)4

月に青葉ヶ丘(現青葉園中学校校地)から現在の清水ヶ丘校舎へ移転、昭和31年(1956)9月には20年振りに創立50周年記念式典、祝賀会が盛大に開催され、桜陽会も母校へ什器一式の寄贈、記念総会、慰霊祭、懇親会を開催、昭和33年(1958)6月には桜陽会報戦後再開第1号を発刊するに至ります。この頃には、折からの経済復興と男性会員の加入が年々増加すると共に、再び活動は活発となり、定時総会開催の当番制や、桜陽会報の年2回発刊、新名簿の刊行、

支部の再建、周年事業での母校協力の拡大等が続けられ現在を迎えているのです。開校110周年の時点で卒業生が総計3万7千余名を数えるまでになった本校と桜陽会の歴史を振り返ってみると、変革の時代があっても旧庁立小樽高等女と現小樽桜陽高校の卒業生が「桜陽精神」を共有し、共に手を携えて母校のために活動してきた素晴らしい軌跡が残されています。これからの皆様方のご健勝と、桜陽会活動への参加とご活躍を心から願っております。